

照日の前の侍女(ツレ)よしなう人は教えずとも。

都への道しるべこそ候へ。あれ御覧候へ雁の渡り候

照日の前何雁の渡るとや。げによく思いだした
り。秋にはいつも雁の。南へ渡る天つ空

侍女そらごとあらじ君が住む。都とやら人もそな
たなれば

照る日の前声をしるべのたよりの友と
侍女我も頼むの雁こそ。つれて越路のしるべなれ

照日の前其の上名におう蘇武が旅雁

照日・侍女玉章を。付けし南の都路に

侍女我をも共につれてゆけ

照日の前宿雁の旅衣

照日・侍女飛び立つばかりの。心かな。

照日の前君が住む越の白山知らねども行ききてや見
まし足引きの

照日・侍女大和はいづく白雪の。高間の山のよそに
のみ。見てややみなん及びなき。雲居はいづく御影
山。日の本なれや大和なる。玉穂の都に急くなあ
り

地謡・照日ここは近江の海なれや。みづからよしな
くも及ばぬ恋に浮舟の。こがれ行く旅を偲ぶの摺
衣。旅を偲ぶの摺衣。涙も色か黒髪。あかざり

し列路のあとに心の浮かれきて。鹿の起き臥し堪
えかねて。程通い行く秋草の。野暮れ山暮れ露分
けて。玉穂の宮に着きけるけり。玉穂の宮につきにけ
り。

廷臣時しも頃は長月や。まだき時雨の色薄き。

紅葉の御幸の道の邊に。

非形を戒め面に。御幸の御前を清めけり

照日の前さなきだに都に馴れぬ鄙人の。女どいい狂
人どいい。

輿舁さこそ心はならの葉の風も知る露霜の。御
幸の御前に進みけり

廷臣ふしぎやを其様人に変りたる。狂女とみえて
見苦しやとて。官人立ち寄り払いけり。そのさ
候へ

侍女あら悲しや君の御花籠を打ち落とされて候
照日の前何と君の御花籠を打ち落とされたとや。
あらいままし御事や候

廷臣いかに狂女。持ちたる花籠を君の御花籠とて
湯仰するは。そも君とは誰が事を申すぞ

照日前麻事新しき同じごとかな。此君ならで日の
本に。異君のましますべきか

侍女我等は女の狂人なれば。知らしと思し召さる
るか。忝くもこの君は。応神天皇五代の御孫。

過ぎし頃まで北国の。味真野と申す山里に

照日の前男大迹邊の皇子と申ししが

侍女今は此國玉穂の都に

照日の前継体天皇の君と申すとかや

侍女さればかほどにめでたき君の

照日の前御花籠を恐れもなきて

侍女打ち落とし給う人こそ

照日の前我よりも程物狂いよ

地謡・照日の前恐ろしや。恐ろしや。

侍女たとへ教えていただかなくても道しるべが
ありますよ。あれを見て下さい

照日の前なに雁が渡っているのか。ああ今思い
出しました。秋にはいつも雁が南の空に渡って
いくもの…

侍女「秋に逢おうといつ」君の言葉は嘘ではない
都も南の方角なのだから

照日の前雁の声を道しるべに。雁を友として
侍女私も雁こそは、越路からの道案内です

照日の前その上有名な蘇武の旅雁

照日・侍女雁が手紙をつけて都へ飛び

侍女私達を一緒に連れて行ってください

照日の前宿も借れない旅だから

照日・侍女飛んで行きたい我等の心
照日の前君が住む白山知らねども…という古
歌があるが、君の住む都はどんな所かわからな
いが行ってみたいもの

照日・侍女都のある大和はどこなのだろう、は
なれて分らないが君はどこに居るのだろう。日
本の中枢大和、玉穂の宮に急いでいるのです。

地謡・照日「ここは近江の湖、私は儂いこと、お
よばぬ恋に浮かれて、湖の船のように。」恋焦が
れ行く旅の身に忍ぶ摺衣を着て、涙にも色があ
るのか黒髪の、飽きもせぬ仲なのにわかれてし
まい、それから、心が浮かれて、鹿のように寝て
も覚めても、君の思いに耐えかねて、なおも通
行く秋草の、野山に日々暮らし。露を分けて玉
穂の宮に着いたのです。

廷臣折りしも九月の頃、まだ時雨には早く、色
薄い紅葉を御覧になる行幸の道筋に、妨害する
者を警戒し、警護のものが行幸の前を警戒して
いた。

照日の前ただでさえ都になれない田舎者で、ま
してや女で狂人といつ。

輿舁さぞかし慣れていない都であつたらう。心
乱れる儂い身で行幸の前に進み出ました。

廷臣不思議なこと、様子が狂人に見えて見苦し
いことと官人が追い払う

「そこを退きななわ」

侍女ああ悲しい事。君の花籠を打落とされてし
まいました。どうしよう。

照日の前何と君の御花籠を打ち落とされたと
は、ああ不吉なことでございます。

廷臣狂女よ。貴女は持っていた花籠を
君の花籠と言っていたが、その君とは誰の事を
申すのか。

照日の前いまさら何をか尋ねになるのか、この
君のほか、この日本に、別の君がおいでになる
のか。

侍女私らが、女で狂人だから何も知らないと
思っているのか、この君は応神天皇の五代の孫、先
ごろまで北国の味真野という山里に

照日の前男大迹の皇子と申しあげていた

侍女今はこの国玉穂の宮におられる

照日の前継体天皇ともうされるとか

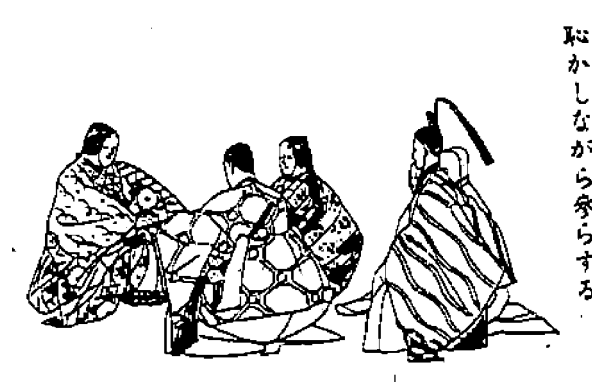
侍女それならこれほどめでたい君の

照日の前御花籠を恐れもせず

侍女打ち落とすなざる貴方方こそ

照日の前私達より大物狂いです

地謡・照日の前恐ろしや



恥かしながら参らす